

令和5年度第5回乙訓地区小中学校使用教科用図書採択協議会 概要

日時：令和5年7月26日（水）

午後1時30分から同4時35分まで

場所：長岡京市立図書館3階 大会議室

1 開会・挨拶

西村会長（長岡京市教育委員会教育長）

2 出席者

(1) 協議会委員

- | | | |
|-----------|------------|------------|
| ○ 西村文則 会長 | ○ 山本真也 副会長 | ○ 馬場信行 副会長 |
| ○ 福澤秀夫 委員 | ○ 京樂真帆子 委員 | ○ 大下和徹 委員 |
| ○ 盛永俊弘 委員 | ○ 松本克彦 委員 | ○ 中野緑 委員 |
| ○ 畠山亮 委員 | ○ 吉川栄一 委員 | ○ 南頭融 委員 |
| ○ 淵田瑞希 委員 | ○ 野田昌之 委員 | ○ 大柳充 委員 |

以上、15名

欠席者 流石智子 委員、宮本佳子 委員

(2) 研究員

代表研究員及び市町指導主事21名

(3) 各市町教育委員会等事務局

長岡京市 4名

裕教育部次長兼学校教育課長、渡邊学校教育課主幹兼学校教育係長、塩貝主事、森下主事

向日市 2名

紺野学校教育課長、藤田係長

大山崎町 2名

吉田学校教育課長、飯山学校教育主幹兼学校教育係リーダー

オブザーバー

京都府乙訓教育局 渡邊企画教育課長

3 議題 調査研究の最終報告

各教科の代表研究員及び指導主事が調査研究の最終報告を行った。

(以下、質疑応答及び意見。質疑を「○」、応答を「→」、意見を「◎」で表す。)

① 国語

【国語】

- 教育出版の伝統芸能の紹介について、狂言以外の取り扱いはどうだったか。
→ 多様なジャンルから取り上げているという特徴がある。

- 東京書籍がデジタルコンテンツの数が多い特徴であるが、児童や教員はどの程度、活用されるか。
→ 現在小学校には1人1台端末が配備されており、児童自身が2次元コードを読み取ってアクセスが可能である。動画であれば教員が大型モニターを使って一斉に視聴したり、練習問題であれば各自で取り組んだり、幅広い活用が見込まれる。

- 各出版社とも中学校で学習する古典作品を掲載しているが、小学校で学習する必要がないのに紹介している意図は何か。
→ 学習指導要領上は必修ではない。中学校への円滑な接続を図るため、紹介されている。

- 点字について取り上げられているが、出版社によって取り扱う学年が違ったが、支障はないか。
→ 点字についてはSDGs等の観点から出版社が取り入れているもの。学習指導要領上に必修化されたものではないため、特に支障はないと考えられる。

- ◎ 東京書籍の高学年は1冊となっているため、以前に学んだことを関連づけながら読み進めることができる。

【書写】

- デジタルコンテンツについて、書写ではどのような活用ができる見込みか。
→ 筆順や実際に書いている様子が手元のタブレット端末から視聴できる。児童が机上で横に並べて見ながら学習することが可能である。

- ◎ 東京書籍は、硬筆で学習した後にまた毛筆に戻るといった往復の学習で技術を高める工夫がある。

② 社会

【社会】

- 各出版社の近畿圏の取り上げ方はどうであったか。

→ 東京書籍は明石市（3年）、尼崎市（6年）、教育出版は大阪市（3年）、日本文教出版は姫路市（3年）、大阪府・神戸市・和歌山県（4年）、和歌山市（5年）であった。京都府や京都市を取り上げている出版社はなかった。

◎ 現在使用中の東京書籍は、單元ごとに4つの学習段階（「つかむ」「調べる」「まとめる」「いかす」）であり、児童の学習に馴染んでいて使いやすい印象である。

○ 東京書籍の單元ごとのまとめが児童に取り組みやすいと感じたがどうか。

→ 知識理解をまとめ、定着させることが社会科の学習で必要になる。また、その知識を使って次の学習への意欲向上につながるかという視点でも、まとめが充実していることは大切である。東京書籍の場合、まとめの作業で完結せず、次に生かせる態度の育成に資する点で4つの学習段階が優れている。

○ デジタルコンテンツにもまとめ用の教材が入っていると思うが、どの程度授業に生かせるか。

→ デジタルコンテンツについては、日本文教出版がワード形式のワークシートのため、デジタル上で扱いやすい印象であった。東京書籍と教育出版はプリントアウトして書き込む形式であった。

◎ 東京書籍は、近現代史に関して淡々と書かれた印象を持ったが、全般的なバランスは上手く取れていた。

【地図】

○ 社会と地図が同じ出版社である必要はあるか。

→ どちらも東京書籍となった場合、地図帳のデジタルコンテンツから社会の教科書と連動した資料が視聴できるという点はメリットと考えられる。

◎ 帝国書院は広く見渡す地図を掲載している。どちらの出版社もクイズを通して児童の興味関心を惹きつける工夫がある。

○ デジタルコンテンツの特徴は。

→ 帝国書院の2次元コードがより多く掲載され、実物の写真や映像が充実していた。

○ キャラクターや吹き出しの特徴は。

→ 東京書籍はドラえもののキャラクターを効果的に使っており、他2社も動物や吹き出しを使って、それぞれ児童に気付かせるよう工夫されている。

③ 算数

○ 乙訓地域の小学校では割合の単元で主に関係図を使って学習をしているとの報

告であったが、何か特別な指導方法なのか。

→ 特別な指導方法ではなく、現行の啓林館の教科書に即して関係図を使って学習しているため親和性が高い。関係図を使うことで立式がしやすい特徴がある。

◎ 個人的にも関係図の方がしっくりとくる印象がある。中学校へのつながりを円滑化するためにも適切と思われる。

○ 啓林館の体積の単元で、石の体積を水が増えた分で測るなど、理科の学習ともつながっていて面白いと感じた。他教科とのつながりや中学への連携はどうであったか。

→ 中学校への連携については、どの出版社とも中学校での学習の紹介などを掲載していた。また、各社ともSDGsや伝統文化等を取り上げ、他の教科等と関連づける工夫が見られた。

○ 図形が苦手な児童が多い傾向と思うが、デジタルコンテンツの充実度はどうか。

→ 学び直しができるコンテンツが充実している印象であった。例えば、円のかき方やコンパスの使い方など、授業での学習内容を動画視聴によって学び直すことができる工夫があった。

○ 東京書籍のみ小学校5・6年生で、その他は全学年の教材でプログラミング教育が取り扱われているが、乙訓地域では全学年で学習を行っているのか。

→ 全学年でプログラミング教育を行っている。

④ 理科

○ 出版社ごとに教科書の大きさが異なるが、実験などの際、教科書の使い勝手には違いはあるか。

→ 紙質に違いがあったが、大きさや重さと写真の掲載量は比例していなかった。大きい方が見やすい面もあるが、サイズ感による使い勝手の大きな差異はなかった。

○ リトマス紙や実物、実験の様子など様々な写真が掲載されているが、出版社によって使いやすさに差異はあったか。

→ 単元によって違いがあり一概には言えないが、特に目立った差異はなかった。

⑤ 生活

○ 文字の大きさに違いがあったが、低学年にとって使いやすさはどうか。

→ 1年生から少しずつ文字を覚えてゆくため、文字は大きく見やすいことが重要。文字の記載が全くないのも困るし、多過ぎてもよくないと考える。

○ 掲載される写真はできるだけ楽しさが伝わってくるものが相応しいと思う。そ

の点で何か特徴はあったか。

→ 東京書籍の写真は見やすく、写真とイラストが上手に組み合わせられた印象であった。啓林館も明るくきれいだった。大日本図書は全体的にトーンが重く、硬い印象であった。

⑥ 音楽

○ デジタルコンテンツの各社の特徴はどうか。

→ 教育出版は2次元コードに「見る」「書く」「知る」「きく」のマークを分かりやすく示し、児童の興味関心を持って学ぶことができる工夫があった。教育芸術社は2次元コードが豊富で、コンテンツを用いて試行錯誤しながら音楽づくりができた。音源を使って演奏やグループ練習ができるなど主体的な学びを深める工夫があった。

◎ 教育芸術社は紙面がきれいで絵も分かりやすく、曲のイメージがつかみやすいと感じた。

○ 指導者側の視点から、それぞれに特徴はあるか。

→ 教育出版は大枠で設定され、指導者の裁量が大きい印象。教育芸術社はマークや吹き出し、振り返りなどを配置し、教員側も学習の見通しを持って指導しやすいと思われる。

◎ 教育芸術社は英語歌詞も1年生から取り扱いがあり、著作権の内容について詳しく書かれていた点が良かった。

◎ コロナ禍のため対面で演奏ができなかった時にインターネットを通して一緒に演奏していたことを取り上げていた。教育出版ではコロナ禍での例外的な取組としての紹介であった一方で、教育芸術社では演奏方法の一つとして紹介されていた点が個人的には残念だった。

⑦ 図画工作

○ 指導者の視点で各出版社の特徴はあったか。

→ 日本文教出版は見開き2ページで示され全体を見取りやすく使いやすい印象である。開隆堂も必要な情報と活動写真の構成に指導しやすくする工夫が見られた。

◎ 2次元コードから動画を視聴できることは、工作の学習においても大変有効と思われる。

⑧ 家庭

○ デジタルコンテンツについて各出版社の特徴はどうか。

→ 東京書籍はコンテンツ数が豊富で、特に、左利き児童用の動画数が多かった。

開隆堂はコンテンツの内容が精選され、重要事項を中心に内容が整理された印象。

- ◎ 東京書籍は5年生の3学期に1単元の設定となっており、評価の難しさや指導上の調整や工夫が必要になる点が懸念される。

⑨ 保健

- 新型コロナウイルス感染症や薬物乱用防止、パソコンによる健康被害に関する取り扱いはどうであったか。
→ 分量に多少の差はあったが、どの出版社もきちんと取り上げていた。
- 性の多様性やプライベートゾーンについての取り扱いはどうであったか。
→ 性の多様性については、文教社と大修館において掲載量が多かった。プライベートゾーンについては東京書籍のデジタルコンテンツのみ取り扱いがあった。
- 思春期の心身の変化に関して、どのように取り扱われているか。
→ 学習指導要領上、3・4年生で心身の変化について学習し、第二次性徴を中心に、心の変化なども併せて学習する。発展として「自分らしさ」を取り上げ、悩みがある場合は相談しようという流れで構成されている。
- ノートやカードが別冊になったものもあるが、使いやすさの点からどうか。
→ 授業を想定すると、教科書に書き込める方式が使いやすいと思われる。一定の分量が書き込める必要がある。

⑩ 外国語

- 東京書籍、開隆堂、三省堂については別冊があるが、使い勝手はどうか。
→ 別冊について、内容はどの出版社も工夫されていた。別冊の使い勝手について一概には言えないが、児童にとっては1冊にすべて収まっている方が振り返りやすいという面はあると思われる。
- 発音の学習について、各出版社の特徴はどうか。
→ どの出版社も大きな差異は見られなかった。
- 教育出版については日本文化を数多く取り上げているとのことであったが、他国のことが少ないという心配はないか。
→ 他国の文化も取り上げているためその心配はない。教育出版は特に5・6年生で日本文化や偉人についてしっかりと取り上げられていた特徴があった。

⑪ 特別の教科 道徳

- いじめ問題の取り扱いについて各出版社の特徴は。
→ いずれの発行者もいじめを間接的・直接的に考えられる教材が選定され、様々

な観点から考えを深められるよう工夫があった。学習内容の補足資料を載せていたのは、東京書籍、教育出版、光村図書、日本文教出版、光文書院の5社であった。また、日本文教出版ではいじめの四層構造についても取り上げられていた点が特徴的だった。

- LGBTQに関する取り扱いはどうであったか。
→ 教育出版1社のみが取り扱っており、ペンギンを題材にして詳しく書かれていた。

- デジタルコンテンツはどうであったか。
→ 各社とも朗読音声やスライド動画等の視聴ができ、ワークシートの入手が可能であった。東京書籍と日本文教出版は音声教材に併せて動画も付いていた。

- 日本文教出版の「道徳ノート」は現行でも活用されていると思うが、使い勝手はどうか。
→ 授業では「道徳ノート」を毎時間活用することで考え、深め、共有することができる。また、ノートを見返すことで考えの変容や成長が見られる点も良い。他の出版社もデジタルコンテンツからワークシートを入手することは可能であるが、別冊ノートは有用と考える。

- 各出版社では発問が設定されているが、指導上の取り扱いはどうか。
→ 教材を用いて、どこで立ち止まって児童に考えさせるかは教員の裁量であるが、出版社があらかじめ明示しているのが発問である。